

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



研究生現地研修：6月4日～5日 研究生は研究員と共に、五箇山地方の念仏道場を訪ね、真宗寺院の成り立ちを学んだ（写真の無断転用はご遠慮下さい。）

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを
真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 講義抄録
真宗儀式の教相 ②・③
- ・ 研究生現地研修
真宗寺院の歴史を訪ねて ④・⑤
- ・ 講義抄録
東日本大震災を受けて ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆ 挟み込み（※寺報などにご利用ください）

講堂道場礼すべし

は、まさに人生の寄る辺なのである。

その道場樹の梢に風が吹き渡ると、樹木の葉が裏を見せ、表を見せ光り輝き乱転する。何かそこにはハツと息を呑むような転調を伴った楽曲が、聞こえてきそうな感じがする。ちょうどそれは、人の不安と悲しみの三塗苦難の音が、先師のことばによって自然に快楽音と転じられるのに等しい。これを「音響」という。

不安と悲しみの原因を、自分勝手に分析せず、仏の教えに順い本願に聞いていく。その姿勢を「柔順」という。聞法によってのみ、悲しみの根源の原因を知らされ、思い通りにならない現実の中にあっても自分の位相を知らされてくるのである。

しかし私たちは本願に自己を聞き訪ねるといながら、不安と悲しみに苦悩する自と、苦悩させる他と、苦悩の現実を二つに分けて見てしまふ。自らを是・他を非、自らを賢・他を愚と判断している。二つに分けてしか見ることのできぬ私だったと知らせる、そのはたらきを「無生法忍」というのではない。仕分ける必要のない水平の大地に道場樹はそびえ建つ。どこにいても、遠く離れていようと、間近にいようと如来は私を撰取して捨てることはない。

よくよく憶えば二十五年間、不法懈怠を生きてきた私を道場樹と連れ合いは案じつづけてくれていたのである。

（教化センター主幹 荒山淳）

とある。安楽国土の莊嚴である「道場樹」とは、灼熱の炎天下、人生の道中に疲弊した人々が、不安立の身を清陰の樹下に寄せて、先に身を寄せていた先師・先輩の語ることばに耳を傾け、皆が歩んできた人生の来し方を振り返る場である。そして、我が人生の行く末を志願し憶念するところなのである。寄らば大樹の陰というが、清陰の樹下

無量寿仏のその道場樹は、高さ四百万里なり。（中略）この樹を見るもの、三法忍を得。一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍なり。

（聖典三十五頁）

講義抄録

2013年4月12日

〈研究生「教化研修」〉
「真宗儀式の教相」たけはし ふとし
竹橋 太氏
(本願部出仕)

第11回



本尊は莊嚴だろうか

「本尊」について考えるとき、「本尊が莊嚴である」と言ってしまうことに、少し抵抗があるかと思えます。「莊嚴」という言葉については、『阿彌陀經』で述べられる七宝の池などの「功德莊嚴」や、『浄土論』の二十九種の「莊嚴功德」などとして出てきます。このような莊嚴は、はるか遠くにある浄土という世界を表現したものであり、また表現そのものがはたらきをもっているということが功德という言葉で言われるわけです。『浄土論』の中では浄土の衆生の一人であり、その主として、阿彌陀如来は莊嚴の一として述べられています。

浄土真宗の教えでは、法藏菩薩が五劫に及ぶ長い思惟を経た後に、四十八の誓願を建てそれを成就して「極樂浄土」を建立したという物語になっています。それを受け、「私もその道を歩むのだ」という考え方も成り立つのですが、浄土真宗の教えから見れば、私たちは救われる側にいるのだと思います。人間は、「自他を生きる」「善悪を生きる」「生死を

生きる」存在です。私たちは常に自他とに分け、自分で自分を評価し、善と思われる方向に向かおうとします。私たちはそうするようにできていますし、これ以外には人間のあり方はありません。仏教を学んでも捨てることはできません。しかし、そうやって生きていくということを知ることはできません。そういうことを私たちに知らせるために表現となった仏の寛り(証)が本尊であり、浄土、つまりその莊嚴なのです。

本尊はコトかモノか

従来から「本尊とはモノではない、コトである」とか、「本尊とはハタラクである」ということが言われています。これはつまり、仏像や名号の軸というものがそのまま本尊ではなくて、南無する私がいることによって本尊と成る、つまり南無阿彌陀仏が本尊であるということです。あるいはそういうことを起こすはたらきこそが本尊であり、それが南無阿彌陀仏の意味である、という大事な指摘だと思えます。

しかしだからといって、形となったものを本尊ではないと言ってしまえば、言い過ぎで、それでは何か大事なことを損なっているように思います。

積尊の寛り(証)の内容である本願力や真如というような形のないものが、形となった、それが莊嚴なのです。その時に、形のない「ハタラク」の方が本尊の実体であって、形のある「モノ」は本尊ではないと言ってしまえば、はたらき・形つまり無形・有形という二項対立・分別に陥ることになります。二つは並立しているわけではありません。形のある「モノ」は、形のない「ハタラク」が形となった、つまりその「ハタラク」の現われであるのです。そういう受け取りが大切です。その形以外には真如というものも存在しないわけです。形がないということは、形のない実体があるわけではありませんが、形がないということは実体がないのです。それが形となる、どんな形にもなるということです。

どうにも私たちは二元的表現に依らなければ理解できません。これが人間の思考の限界であるわけです。形がない「ハタラク」というものと考えてしまうので

す。どのように表現しても二元論に墮ちていきますから、「表現として形をとる、そしてそれ以外には何も存在しない」というようなニュアンス、イメージを理解していただきたいと思えます。

そういう点から今まで本尊とは「コト」である、「ハタラク」である、という言葉でいわれてきたことによって、形にまなつた、「モノ」にまなつた真如のはたらきを、二元論的に、つまり善悪で否定しては台無しなわけです。そういう「ハタラク」が浄土という表現となり形となったものとして捉え返す必要があるわけです。ですから本尊は「コト」であって、さらに「モノ」ともなっているのです。「コト」だけを言っているのは、お寺や教団、儀式といった形の根柢は存在しない事になります。ですから、私たちの世界の仏前のお莊嚴も同じです。そして、儀式における感動や新たな感覚を、本願のはたらきによっている」と、教えによって確かめていく。そういう方向を儀式執行の場と与えなければなりません。そういう意味から「本尊も莊嚴だ」ということが言えるのだと思います。

親鸞聖人は『法華経』を極めた人？

比叡山延暦寺は天台の学場として『法華経』を学ぶところです。天台宗の教義の骨子は、『法華経』と龍樹の『中論』という「空」の教えです。また密教という要素もありますが、その他に聖徳太子信仰という背景を持っています。親鸞聖人が聖徳太子信仰を得たのは比叡山だと

いうことになりました。ご存知のように伝説では、十九歳、二十八歳、二十九歳と、三回も夢告というかたちで聖徳太子に導かれていきます。

よく「親鸞聖人は比叡山を棄てた」と言われることがありますが、聖徳太子に導かれた聖人の生涯を見れば、棄てたのではなく、むしろ比叡山で得たものを身の一部にしておられたのだと思います。

親鸞聖人は『教行信証』において『法華経』を二度も引用されていないから「棄てた」とは言えません。逆に非常に影響力の強い『法華経』を、一度も引用せずに書かれたということは、『法華経』を熟知していないとできることではありません。そもそも、親鸞聖人は『法華経』を評価したり、棄てたともおっしゃっていません。「私は自力で救われる機ではない」という言い方をされますが、「自力の教えは間違っている」とはおっしゃっていないのです。仏説を批判されるような事はありません。あくまでも時・機の問題として述べておられます。

どうしても我々は、善悪で物事を見てしまいますから、自力が駄目で他力が善いというような判断をしてしまいます。これだと仏教の教えも親鸞聖人のことばも、聞こえてきません。親鸞聖人が『法華経』を引用して作成されたのが次の和讃です。

久遠実成阿弥陀仏

五濁の凡愚をあわれみて
釈迦牟尼仏としめしてぞ
迦耶城には応現する

『浄土和讃』

「諸経のころによりて弥陀和讃」
(真宗聖典四八六頁)

「久遠実成」、「迦耶城に応現」というような言葉が使われる背景には『法華経』が存在しています。本来天台宗では、「久遠実成釈迦牟尼如来」と言います。これは天台宗の第六祖の湛然のことはずが、『法華経』の「如来寿命品」の有名な「自我偈」（日蓮聖人が『法華経』の眼目といった経文です）に依っています。

「久遠実成」とは、釈迦は三十五歳で覺りを開いたのではなく、永遠の過去からの仏であったという考え方です。大乘仏教が生まれてきたことと関係がありません。大乘仏教は釈迦さまが亡くなられた後に現れた教えですから、無仏の世に、人々はどうのようにして仏にあうことができるかという問題を抱えていました。

歴史的には他方国土で仏にあうという表現が先行しました。『無量寿経』もその系譜に連なります。それに対して、「今ここに法」としてお釈迦さまはいらっしやる」という教えを展開したのが『法華経』なのです。これはとても画期的な教えなのです。

弥陀成仏のこのかたは

いまに十劫とときたれど
塵点久遠劫よりも
ひさしき仏とぞみえたまう

『浄土和讃』「大経意」

(真宗聖典四八三頁)

これも『法華経』に依るわけです。「讃阿弥陀仏偈和讃」では「いまに十劫をへ

たまえり」とありますが、じつはそれ以前、久遠実成の釈尊の成仏した「塵点久遠劫（とてもとても長い時間）」よりも、さらに以前に阿弥陀さまが成仏されているというわけです。

親鸞聖人は『法華経』の「久遠実成釈迦牟尼仏」から、さらに「久遠実成阿弥陀仏」ということをおっしゃるわけです。お釈迦さまが仏である所以を、阿弥陀というはたらきに展開されたのが親鸞聖人の理解です。『法華経』をよく知らなければこんな和讃は書けません。

浄土真宗の儀式は、凡夫の儀式

ということですが、『法華経』では此の土での覺りが説かれるわけです。我々は何かを祈願して手を合わせるときがあります。それは自分の欲望に手を合わせているということになります。自分の世界を、自分の思う通りに生きようという私たちの姿です。そういう欲望をかなえる対象として、仏さまを自分の中に取り込んで生きているということなのです。善し悪しではなくて、人間とは基本的に、そういうものなのです。そして、『法華経』の教えはそういう形で、人間に引き込まれやすい性質をもっています。日蓮宗系においては「日蓮本仏論」を説く門流もあるのです。さらには「凡夫本仏論」まであるのです。

『法華経』は、お釈迦さまが一切諸仏の本体であるとする「釈尊本仏論」です。しかし、親鸞聖人は阿弥陀仏を本尊とします。では、何が違うのでしょうか。世間一般の人から見れば、あまり変わらないように見えます。決定的な違いは、親鸞聖人の場合、「この身では救われない」

私たちが「あの先生は凄い人だ」と、本仏に仕立てます。「あの先生の話はすばらしい。あなたわからないの？」となれば、そう言っている自分は先生とひとつとなり、自身も本仏になって人を見下しているのです。親鸞聖人は、そういうところに陥らないように、いろいろと言葉を尽くして浄土真宗の体系を築かれたのだと思います。

私たちが執行する仏事は、あくまで「凡夫の仏事」です。世間一般の人からすれば、お坊さんが読経する姿は、浄土真宗も他の宗派もあまり変わらないように見えていると思います。しかし、私たち浄土真宗の門徒が忘れてはいけないのは、「私自身は、あくまでも凡夫だ」ということなのだと思います。それが南無阿弥陀仏が本尊であることの意味だと思えます。

(文責編集部)



現地研修

2013年6月4日～5日

真宗寺院の歴史を訪ねて

〜五箇山地方の念仏道場を体感〜

さる六月四日から五日、研究生現地研修として富山県五箇山地方を中心とした真宗寺院や念仏道場、また、真宗寺院として最も古い本堂の形態を有している高山市照蓮寺を訪問した。五箇山地方は中世以降、蓮如上人を通して真宗の教えが広まり、各集落に念仏道場が設けられた。ここに残されている念仏道場は、今日の一般的な真宗寺院と異なる押板形式の内陣を有しており、道場に専住の居住者はなく、集落の門徒の中から道場主を選出するなど、初期真宗の道場の形態が今に伝えられている。

このたびの研修には、当教化センターで真宗史を担当する小島智研究員も同行し、真宗寺院の成り立ちの歴史を学びつつ、研究生各々が真宗寺院のあるべき姿を模索する契機となった。

本号では、研究生が五箇山で感じた真宗寺院のあるべき姿についてのレポートを掲載する。



世界遺産 相倉合掌集落の民宿 (与茂四郎) に宿泊

赤尾の道宗に思いを馳せて

富山県五箇山地方には、各集落ごとに寺院や念仏道場が存在していた。今回我々は、世界遺産になっている五箇山相倉合掌集落の民宿に宿泊し、真宗大谷派高岡教区「相念寺」のお朝事にお参りさせていただいた。冬は雪に閉ざされる山深いこの地で暮らしている人々が、白山信仰から、なぜ念仏の教えに出遇うことになったのか、蓮如上人と当時のこの地に住む人々との出遇いも想像し、とても心が締め付けられた。

また、赤尾の道宗が開いた行徳寺でお話を聞き、道宗の蓮如上人への絶対的信頼感はいったどこから来るのだろうかと考えさせられた。

第七期生 安部 淳



寿川念仏道場

お寺は変わらないもののシンボル

このたび訪ねた念仏道場は、住職などの専住者が寺院に居住して管理するのではなく、集落の人達が皆で管理していた。今回、たくさんの方を訪ね、地元のご住職のお話などを聞かせて頂き、集落の方々にとって本当に大事な場所なんだということを感じた。

日程の帰り道に立ち寄った高山昭和館という、昭和の街並みと生活を再現した施設を訪れたのだが、わずか三〇〜四〇年の間に、こんなにも世の中が変わったことに驚かされた。しかし、逆に五箇山の道場が何百年もそのまま残っていることの凄さをあらためて痛感した。

私はふと、寺院というのは「変わらないもの」のシンボルとしての役割を担っているのではないかと感じた。たとえ街並みや暮らしは変わっても、みじいちゃん、ばあちゃん、ご先祖様、み



行徳寺では、赤尾の道宗についてのお話をうかがった

んながお参りし、頭を下げ、人生の喜びや悲しみを語り合ってきた「場」を変わずに残したい。そんな願いが道場に込められているように感じたのである。私がお縁を頂いて生活している自坊にも、同じ願いがかけられているのだ。そして、「人が集まる場」が相続されていくためには、変わるのではない「法」をよりどころとした人間関係が営まれなければならないという課題を頂いた。

第七期生 小嶋 朋大



相念寺（大谷派）の晨朝に参拝

自坊との違いに不思議な感じ

今回の現地研修会で寺院の成り立ちということについて初めて考えた。念仏道場については、事前学習で写真を見たり話を聞いたりしてはしていたが、実際に現地に行ってみると写真では実感できない自坊との違いに不思議な感じを受けた。

また、念仏道場には住職はおらず、集落の方々の中から道場主を置き、集落の皆で道場を護持・相続していることに驚いた。私は、今まで寺院の成り立ちの歴史について、ほとんど知らず、気に留めることもなく、そこに込められていた願いを考えようとしなかった。

今回の研修を通して、寺院は、寺に生まれた者の所有物ではなく、「共に教えを聞き皆で相続していく場」であること、あらためて実感させてもらった。

第八期生 石原唯和いしはら ただわ

太鼓の音に驚愕

出仏壇形式ではなく、中尊前・祖師前・御代前が横一列に並ぶ押板形式の内陣や、宮殿や羅網が無かったり、背後の壁面に金箔や漆が施されていない簡素さが印象に残った。

また、どの道場にも太鼓が置いてあり、今回、晨朝に参詣させていただいた相念寺では、ご住職が太鼓を打ち鳴らすところを見せていただいた。お勤めが始まることを知らせる太鼓の音は、「バァンツ」と集落全体に響きわたるように一発、その後「ド・ド・ド・ド・ドン」と続くのだが、その一発目の凄まじい音にとても驚いた。

お勤めの後、相念寺のご住職が語られた「この寺を支えてくれる門徒さんの数は少ないが、お寺を必要としてくれる門徒さんがいる限り、しっかりと護持していきたい」という言葉に、身の引き締まる思いがした。

合掌造りの家々や、緑豊かな山に囲まれた集落の落ち着く景観、宿泊させて頂いた民宿のご家族の和やかな雰囲気、そしてその中にある寺や道場。たった一泊であったが、良い経験をさせてもらった。今度は、自坊の同行や家族を是非案内したいと思った。

第八期生 花園盛二はなぞの せいじ



相念寺の晨朝を知らせる太鼓



高山照蓮寺 真宗道場の初期の形が残されている

念仏の歴史を訪ねたい

険しい山々に囲まれた地にひっそりとたたずむ念仏道場を訪ねて、まず感じたのは、念仏の「歴史」であった。古くから脈々と受け継がれた念仏が、かたちとしてそのままそこにあるような感覚。それは、念仏道場を今まで守ってこられた人々の生活が、まぎれもなくそこにあるという事実からくるものだろう。これは、私たちの寺院にも同じことが言えるだろう。念仏道場から寺院へ様式が変わっていくに従い、「僧侶」と「門徒」という関係が明確になり、その間に溝ができ、そしてその溝が深まっていった。この溝の深まりは、内陣と外陣の段差や、矢来などに、「かたち」として残っていると思う。

今自分がここにあるという事実とともに、寺院が現在まで伝えられてきた「歴史」を、今一度見つめ直したい。それが念仏の歴史をたずねるといふことになるのであろう。

第九期生 田島晶たじま しょう

寺に住むものに託された願い

民家の一間に村人が集まり、そこで念仏を称え聞法した内道場から始まり、村人が力を合わせて念仏道場が建てられ、そこに庫裡ができ現在の形になっていく。五箇山地方には、お寺が今のような形態になる以前の歴史が残っていた。

これまで、お寺は僧侶が中心となって創られてきたという勝手なイメージを持つていたが、五箇山では村の人々によってお寺が創られ、お念仏を中心とした生活が伝えられていた。

これまで自坊や他のお寺が、どのように建立されたのか意識した事はなかった。何年に創建したとか、あのお寺は他宗から転派した等の知識はあっても、どのような経緯で、どのような思いでお寺が建立されたのかについて、思いを馳せることはなかった。

私がお縁をいただいた自坊にも、お念仏の教えを中心とした生活を伝えていくとされた先人の願いが込められているに違いない。時代の流れで形態は変わっても、創建された方々の思いを相続していくことが、寺に住むものに願われていることを、今回の研修を通してあらためて教えていただいた。

第九期生 藤原猶誠ふじわら ゆうせい



世界遺産 相倉合掌集落

講義抄録

2013年5月15日

名古屋教区教化委員会 都市教化部門

同朋社会支援事業 現地研修会（於 真宗大谷派東北別院本堂）

東日本大震災を受けて

—福島を考える—

木ノ下 秀俊氏

（組織部 非常勤嘱託）

今、福島で何が起こっているのか？

今回は福島を考えるということで、東日本大震災から二年、震災の記憶も薄れ風化していく中、思いつくままに話していこうと思います。

まず、東日本大震災では津波と原発事故の被災状況とは分けて考えるべきです。福島県は津波の被害に加えて原発事故の問題が深刻です。今でも福島県の沿岸部は長く警戒区域であったために瓦礫の撤去や復旧事業が進まず、震災当初の状況のままのところが多いです。放置されている瓦礫は、単なる瓦礫ではなく、放射性物質を含んでいる可能性がありますので、作業手順、処分場の設置などの問題から撤去の目途は立っていません。放射能は目に見えず、においも味もありません。線量計という機械だけが放射能の存在を実感させる唯一の手立てです。

二〇一二年十二月十六日に当時の野田首相が発した原発事故の収束宣言によって、福島状況に変化が生まれました。放射性物質に対する警戒感が薄れたのです。たとえば、同じ日に福島県庁前にある学校のグラウンド横で、放射線管理区域

とする基準値の倍の数値が測定されました。放射線管理区域は十八歳未満の者の就労禁止、妊婦は出入りもできないはずなのに、子どもたちがマスクもせず無防備のまま遊ぶようになってきたのです。この状態でなぜ収束と言えるのでしょうか。

国は一年間の被曝限度を二〇ミリシーベルト以下という基準を設け、年間一ミリシーベルトを目標値として国や行政が除染作業を行います。実際には数値がなかなか下がらず、現状が追いつかないから目標値を上げろという陳情を出す市町村も出てきました。収束宣言を機に、日本の法律のダブルスタンダードが顕著になりました。福島県外の皆さんは年間一ミリシーベルト以下なのですが、福島県の人だけは年間二〇ミリシーベルトまでを許容されることになっているのです。

震災当初を振り返る

震災の日、私は組の研修会で富岡町にあり、富岡町から大熊町に向かっているところで震災に遭いました。その晩、現在非難地域である双葉町で過ごし、夜



十一時頃、消防団と警察、町役場、東電関係の会社の方が避難所の小学校に集まり、「明日朝、官房長官が避難指示を早朝に出すので、会見が始まったら皆さんには別の場所に避難していただきます」と言いました。そして双葉町の方はバスで避難、私はご門徒と一緒にしたのでバスに乗らず、早朝四時頃、道を選びながら南相馬まで帰りました。

未だに覚えているのは、避難所を出るとき、東電の方だったと思いますが「どこまで逃げたらいいですか。一〇キロくらいですか」と尋ねたら、「何バカなことを言っているんだ。ガソリンが続く限り遠くに行け」と言われたことです。私にはかなりの危機感を持って双葉町を離れましたが、南相馬に帰ると皆のんびりしていました。その日の午後一、一ノ機が爆発、その爆発音が南相馬でも聞こえたそうです。その途端に自衛隊と警察の車両

が避難を始め、それを見て住人も沢山逃げました。それでも事故の報告や避難指示が国と県からは出ませんでした。

どこが危ないのかという情報も無いままの避難です。最初に私がたどり着いた飯館村も結局は風向きによって高濃度に汚染された場所でした。南相馬市長は震災当初、全く情報が無かった」と言いましたが、情報開示請求から得た資料によって情報を聞かされなかったのは住民だけだったことが解ってきました。

震災から二年が経過して、断片的な情報をジグソーパズルみたいに埋めていくと、当時の国や行政が原子力災害は起こったけれど、できるだけ小さく見えるように印象操作をしようとしていたことが見えてきます。

新たな安全神話

日本の原発はチェルノブイリと違って爆発しないとされていますが、今回最悪の事態が起こり原子力の安全神話は崩れ去ったはずはです。

しかし今、「放射能が漏れても健康被害はない」という新たな神話が作られ始めています。「世界一安全な原発」とは、事故を起こさないのでなく、事故を起こしても健康被害が出ない原発だと言っているような気がしてなりません。

チェルノブイリ事故の後、汚染地域から様々な報告があった中でIAEAが認めた放射能による健康被害は、「小児甲状腺がん」だけで、それ以外の健康被害は原発由来ではないと言われています。「大人には影響がありません」という説明は、大人は「小児の甲状腺がん」と診断されないというだけのことです。

今年の五月八日、南相馬市立病院の医師が国会での報告で、原発事故以後、六五歳以上で脳卒中になる患者は震災前の一・四倍、三五歳から六五歳未満の壮年層は三・四倍になったと伝えました。この二日後、放射線医学総合研究所が年間一ミリシーベルトの被曝量を超えると腎臓に影響が出ると発表しました。大人だから自分は大丈夫だと思っていた人は多いはず。

こういう現状が周知されずに、原発の海外輸出、国内の原発再稼働。そこには健康被害の存在は困るという意図がパズルの絵のように見えてきます。国は新たな安全神話を作り、日本の原発は爆発しても誰も死なない世界一安全な原発になる。今思うと震災直後から、我々は氾濫する情報に翻弄されているようにも見えます。

除染とお祓い

期待されていた除染は、汚染された土を削って掘った穴に埋めるだけで、やり方によっては放射性物質が散らばるだけです。除染で放射線量は一時的に下がりますが、場所によってはしばらくすると元に戻ってしまいます。除染している方を責めているではありません。方法が確立されておらず、試行錯誤しながら進めている現状があるのです。

放射能は目に見えません。最近、除染作業がお祓いのように見えて仕方がないのです。除染はお祓いと同じで、実利的な効果はさておき「何かすつと軽くなつたような気がする」効果をもたらししているように思います。

震災以来、福島には本当に様々な人が

出入りしています。ある先生は、「年間一〇〇ミリシーベルトまで大丈夫。飯館村でこれから「がん」になる人は、放射能の影響ではなく不摂生が原因で、むしろ放射能を怖いと思う気持ちが良くない。だから毎日ニコニコ笑っていたら大丈夫だ」と言い続けていました。



線量計を使いながら説明する木ノ下氏

我々には放射能についての知識などありませんので、「危ない」と言う先生と、「大丈夫だ」と言う先生の狭間で、もう、宗教みたいなんです。どの先生の話信じることか。誰を信じることかというところが難しい。皆一人ひとりの立場があり、その立場から誰を信じるのか、夫婦でも親子でも信じる宗教が違うというような状態になるのです。そこに、人と人との間で分断が起こります。

分断されている福島

私自身は南相馬市の出身です。十年後に、「あの時は大騒ぎして恥ずかしかつ

たね」と言いたいけれど、こればかりは時間が経たないとわかりません。

昨年、福島の子ども三十万人のうち三万八千人が検査され、そのうち十人程が「小児甲状腺がん」と診断されました。小児甲状腺がんの発生率は世界では百万人に一人だそうです。郡山市では集団疎開を求めている裁判が起こり、地裁では却下、仙台高裁では著しい健康被害の可能性を認めながらも、疎開については個人の判断に委ねるという判決でした。

こういう現実に対し、沢山の人がそれぞれの立場から、どの話を信じるのかを考え、何をするかを決めているのです。県や国は人を県外に出さないように囲い込みをし、経済界は経済復興が福島の復興だと考え、教育関係者は教育委員会の立場から行動する。農業の方は五〇ベクレルしか出ないから安全だと、何としても米を作ること考える一方で、一〇ベクレルだって子供には食べさせたくないと考える母親もいるのです。それぞれ一応筋は通っているのですが、その一つ一つが分断されています。それが今の福島です。

その分断の中、今の福島は、子どもと家族の健康といのちを何とか守りたいという立場の人が肩身の狭い思いをする地域になってきているように思えます。放射能の話は「ホの話」と言われ職場でも学校のPTAの中でもなかなかできません。「放射能は危ない」なんて話をすると、「全然違う意見の人もいますよ、皆の気持ちが悪くなりますよ」と諫める人が現れます。

しかし、私はここで思うのです。立場によって違いはあるけれど、皆さん放射

能はあるということは分かっているのです。問題は放射能の存在によって、福島の皆が生き生きとできないことなのです。

我々の立ち処

宗派の「今、いのちがあなたを生きさせている」というテーマがありました。最近あの「いのち」というのは小さいお子さんを持ったお母さんが、子ども、そしてその先にある「いのち」までを心配する、いのちの歴史に思いを寄せる気持ちだろうと思うのです。そして、大人、年配の人たちが生き生きと生きるということも「いのち」ということなのではないかと思うのです。

私は今回のような原発の講習会でも「三婦依文」を拝読します。それはこれが我々の立場だと思っております。私は医師でもないし、農業者でも経済人でも政治家でもない。福島の原子力災害と、そこに住む人たちの支援を考える時、信徒という立場を明確にして関わらなければならぬと思うのです。なぜなら、支援する方も沢山おり、それぞれに立場があります。福島を生きる一人一人、そのいのちというものを立場としていく、それが仏教徒の立場であり、三婦依文を称える意味だと思っております。

立ち処を明らかにしたうえで関わっていくことが大切です。そうでなければ、大谷派の主張は無いのです。どの支援団体でも、NPOでも政治団体でも構わないこととなります。

我々は、大谷派という処に立つ。信徒という処に立つ。それが原点ではないかと思うのです。(文責編集部)

研究生報告

親鸞聖人に呼ばれて!?

真宗本廟奉仕団に参加

研究生の課題として、「真宗本廟おみがき奉仕団」に参加し、北海道・京都府・福岡県・愛知県など、様々なところから来られた方々と、まもなく厳修される春の法要に向けて、御影堂に荘厳されるとも大きい鶴亀や輪燈などの仏具を磨いた。

日程の中では、参加された方々の帰敬式を受けた時の思いや柔道の話など、それぞれが今日まで歩まれた道のりについてのお話を聞かせてもらい、とても楽しかった。

その中でも特に「今回は何故参加されたのですか」と私の問いかけに、「親鸞聖人が遊びに来いと呼んで下さった」と冗談交じりに返された言葉に、「ハッ」とさせられた。

今まで、「私は真宗本廟に行く」、「私は真宗本廟に来た」という考えしかなかったので、「親鸞聖人が呼んで下さった」という言葉に、私

自身と真宗本廟・親鸞聖人との関係をあらためて問いかけられたような思いでいっぱいになった。

今回はじめて個人参加という形で参加し、緊張や不安もあったが、参加された方々と日程を過ごす中で、様々な気づきと問いかけをいただいた貴重な体験となった。(研究生8期生 花園 盛二)



INFORMATION

教化センター日報
■2013年3月～5月

3月1日 研究生・学習会「真宗門徒講座打ち合わせ会」
研究業務「平和展」学習会
7日 HPリニューアル会議
8日 研究生・実習「真宗門徒講座(釈尊伝①)」
12日 研究生・教化研修
「第5回伝道スタッフ養成講座」参加
14日 研究業務「平和展」準備
15日～23日 研究業務「第24回平和展」
19日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加

29日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
4月4日～5日 研究生・有志
「子どものつどいin東本願寺」参加
8日 HPリニューアル会議
10日 研究生・教化研修「解放運動推進要員研修」参加
11日 研究生・教化研修
「別院奉仕研修事前学習会」参加
12日 研究生・教化研修
「真宗儀式の教相(第11回)」(竹橋太氏)
15日 研究生・学習会「教区テーマ学習会」参加
16日 研究生・教化研修
「第6回伝道スタッフ養成講座」参加
26日 研究生・実習

「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ①)」
研究業務「平和展」学習会
5月8日 HPリニューアル会議
10日 研究生・実習
「真宗門徒講座(真宗門徒のくらしとつとめ②)」
17日 研究業務「平和展」学習会
20日 HPリニューアル会議
21日 研究生・学習会「真宗史」(小島智研究員)
24日 研究生・学習会「教区テーマ学習会」参加
28日 東別院てづくり朝市出店
29日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援

第24回平和展の展示及びパンフレットに関するお詫びと訂正のお願い

第24回平和展の展示及びパンフレットにおいて、調査・確認していない内容の表記がありましたので、以下のとおり訂正いたします。来場者並びに関係各位にご迷惑をおかけしましたことをお詫びするとともに、パンフレットをお持ちの方は以下のとおり訂正くださるようお願い申し上げます。

教化センター主幹 荒山 淳

訂正箇所

第24回平和展パンフレット 17頁6行目～9行目

訂正前

教主らは1937(昭和12)年3月16日、東本願寺で得度し、ももとの本尊の一つ「弥陀塔」は阿弥陀仏に変更された。「水雲教」は大谷派の末寺「興龍寺」になった。

訂正後

教主らは1937(昭和12)年3月16日、東本願寺で得度した。大谷派より阿弥陀仏が下附され、入仏式が行われた。「水雲教」は大谷派の末寺「興龍寺」になった。

訂正理由

入仏の事実は確認していたが、下附された阿弥陀仏(木像)が安置された場所等については未確認であった。なお、本来の水雲教の本尊は、弥陀塔、金剛塔、無量寿塔。

※ご不明な点がございましたら教化センターまでお問合せください。
(担当 研究員 小笠原 智秀)

《編集子雑感》

▽過日、教化委員会主催の被災地現地研修で1年ぶりに東北を訪れた。東北別院のある仙台駅周辺は名古屋と変わらぬ賑わいだったが、沿岸部の復興は程遠いことを痛感。木ノ下さんが語る「除染作業がお祓いに見える」に、福島は悲痛な現状を再認識させていただいた。▽日程を終え、帰路に立ち寄った二本松市で「二本松少年藩士像」を見かけた。日本の近代化・国益の名のもとに犠牲になった少年たちは、今なお犠牲を強いられているこの地の現状をどのように見守っているのだろうか。(K)



■教化センター

〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。

